

週刊

夢の窓

No.1



むうにい

怪物と魔道士

わたしは見知らぬ街をさまよい歩いていた。

手に、根っ子のような気味の悪いかたまりを持っている。血管のようなものが無数に絡み合い、少し湿って暖かった。

「何これっ？」自分でも、なぜそんなものを抱えているのかわからない。誰かに託されたのか、それとも拾ったのだったっけ？

近くにくずかごを見つける。

「捨てちゃえ……」くずかごに放り込む時、ねっとりとした嫌な感触が手のひらを伝った。

バス停か電車の駅を探して歩く。

どうも街の様子が変だ。夜とは言っても、日が沈んで間もない。それなのに、通りには人っ子1人いない。

1軒の家の窓から光が洩れている。なんの気なしに覗いてみると、少女がベッドに横たわっていた。毛布も掛けず、素っ裸で。

わたしはギョツとした。

けれど、驚愕したのはそのことではない。なんと、彼女の腰から下は、ベッドと癒着していたのだ。

ピンク色のマットレスの上を、血管が縦横に走っている。それらが少女と繋がっていて、まるで臓器の一部であるかのような感覚だった。

「どうしたのっ、何があったのっ？」わたしは窓に手をかけ、そう尋ねた。

彼女は振り返り、

「あなたが、あの根っ子をこの町に持ってきたから……」とつぶやいた。

ベッドの枕元には、茶色いかたまりが鉢に収められて置かれている。わたしがさっき、くずかごへ投

げ捨てた、あの物体に違いなかった。

大変なことになった。どうやら、とんでもないものを、この町に持ち込んでしまったらしい。

「この町はもう、おしまいだわ。ご覧なさいな。ほら、みんな根っ子の呪いにかかってしまっているでしょ？」

促されて外を見ると、街灯の光に照らされて、大勢の影が踊っている。人々の手の先はへびと化し、くねくねと身をよじっていた。もはや人間とは呼べない姿である。

わたしは怖くなって逃げ出した。ただひたすらに走り続けた。

気がつく、大広場にやって来ていた。町中の道という道が全て集まる、そんな場所である。

目抜き通りのずっと先は、果てしない暗闇が広がっていた。ひどく嫌な気配がした。

粘液をこすりつけながら這う、不快な音が近づいてくる。やがて、赤く滲んだ2つの光と、墨汁よりも黒い、おぞましい生き物が姿を現した。

家をも押し潰すような、巨大ガエルだ。

ひと目見て、邪悪な存在であることを悟る。この化け物こそが、「根っ子」を産み出した元凶に違いない。

そうとも知らず、わたしは町に根っ子をはびこらせる手助けをしてしまったのである。

わたしは覚悟を決め、魔物のの前に立ちはだかった。せめて、自分の命と引き替えに、一矢報いてやるつもりだった。

そんなわたしの前に、とんがり帽子を被った、1人の男がさっそうと登場した。

「あとは任せたまえ」そう言うと、携えていた杖を高々とかざす。

漆黒のカエルは、苦しそうにもだえ始めた。周囲の空気は揺らぎ、渦巻く歪空間が出現した。

「闇から来たりし者よ、元の住みかへと帰るがいいっ！」

化け物は、渦の彼方へと吸い込まれていった。

かけられた呪いは解かれ、1人、また1人と、正気を取り戻していく。

広場はたちまち、喧噪で溢れかえる。やがて、自分たちの身の上に何が起こったのかを理解し、救世主である魔道士を求めて湧いた。

けれど、その姿はどこにもなかった。遠く夜空の下、寂しげな口笛の音色が、風に運ばれてかすかに聞こえるばかり。

わたしは、ベッドで横たわっていたあの少女が気になり、元来た道を引き返す。

彼女は、真っ白いドレスを着て、戸口の前に立っていた。

「よかった。元の姿に戻れたんだっ」わたしは、心から安堵する。

「あの魔法使いが救ってくれたの。ところで、あの人の名前、あなたご存じ？」少女が聞いた。

わたしは首を振る。

「怪物を退治したあと、そっと町を出て行っちゃった。今頃はきっと、町外れの1本道だと思う」

数学のテスト

広い教室の、前の方の席にわたしは掛けた。周りを見回すが、知った顔など1つもない。

「コホン……」教壇で軽く咳払いがした。プラズマ理論で有名な、大槻教授が教壇に立っている。「では、これからテストを行うからね。数学のテストだよ。はいはいはい、机の上にはエンピツと消しゴムだけ置くように。あとは、みんなしまうこと」

わたしは内心、かなり動揺していた。テストだって？ しかも、数学とは！ 予習をしてくるどころか、テストの範囲さえもわからない。

そもそも、学校と名がつく場所はすべて卒業したはずではなかったか。それとも、今までのことはみんな勘違いで、まだ学生をやっているのだったっけ？

大槻教授は、1人1人に用紙を配りはじめた。裏返しのままなので、問題が見えない。ますます不安になってくる。

「はいはいはい、テスト用紙は裏のままにしておいてね。見ちゃダメだよ」

生徒の1人が、「はいっ」と言って手を挙げた。

「何かね、小林君」大槻教授が彼を指すと、

「テストの時間が50分を超過した場合、残業手当は付くんでしょうか。それと、香り付き消しゴムはおやつに入りますか？」と真顔で尋ねた。

「超過時間は15分までしか認められていないよ。それに、残業代は30分単位で計算されるから、今回はあきらめて欲しいな。あ、香り付き消しゴムの件だけど、バナナの香りに限っておやつと認めるよ」

大槻教授は、これまた大まじめに答えるのだった。

わたしはそのやりとりがおかしくてたまらず、思わずくすりと漏らしてしまう。教授の耳はそれを聞き逃さなかった。

「君、何がそんなにおかしいのかね。テストは真剣に取り組んでもらわんと困るなあ」そう注意されてしまう。

テストが始まる。

わたしは、用紙を表に返した。

〔第1問 彼女が当時使っていた日焼け止めのブランドは何か？〕

うーん、難しい。もともと数学は苦手だったが、これほどまでに難しいとは。そもそも、彼女っていったい誰のことだろう。まさか、大槻教授のか？

この欄は空白のまま残し、次の問題に取り組む。

〔第2問 船に乗っている人物がいる。1人は剛力彩芽にそっくりだが、あとの3人は誰に似ているか答えよ〕

参考図としてイラストが載っていたが、どれも棒人間だった。どれが剛力彩芽だということか。そして、ほかの棒人間が誰にそっくりだということだろう……。

またしても途方に暮れ、次の問題に進む。

〔第3問 次の人物の容量を記入せよ〕

これもイラスト問題だ。男なのか女なのか、それすらもはっきりしない人物が描かれていて、しかも体重ではなく、容量を書け、というのだ。

容量というのは体積のことだろうか、それとも記憶容量のことなのだろうか。まず、そのことで頭を抱えた。

突如、チャイムの音が鳴り響く。

しまった、テスト時間が終了してしまった！

「はいはいはい、時間が来たので、用紙は後ろから集めてね」大槻教授が声を掛けた。

わたしは落胆して席を立つ。教室を出て廊下をとぼとぼと歩きながら、他の生徒たちの弾んだ声を聞くとはなしに聞いている。

「今日の数学のテスト、簡単だったな。満点、間違いないぜ」

「おうっ、ラクショー、ラクショー。5分で全問、解けちゃったぜ」

わたしは心の中で、なぜだっ?! と叫ばずにはいられなかった。

校舎を出ると、太陽の光がまぶしく降り注いでいた。

ショパンのノクターン

友人の桑田から電話が来た。

「おい、むうにい。今から来いよ。飯を喰わしてやるぞ」

いったい、どんな料理を作ってくれるのだろうか。わたしは自転車に乗って、すぐに彼の家へと向かった。

「来てやったよ」わたしは言い、ガララッと玄関の戸を引いた。

奥から桑田が答える。「上がってこい。居間にいるから」

わたしは遠慮なく、ずんずんとして入っていった。居間のテーブルには満漢全席さながら、ずらっと料理が並んでいた。席についていたのは桑田彼1人ではなかった。

隣に座っているのは、音楽室の肖像画でしか見たことのない、あのショパンだった。

「こちら、ショパン。たぶん、知ってると思うけど」と桑田が紹介する。

わたしは驚きのあまり、

「うそおっ、まだ生きてたのっ?!」と、本人を前に、大変失礼な発言をしてしまう。

しかし、ショパンは気にもしていない様子だった。さすがは、歴史に名を残す音楽家である。

ショパンは、「では、食事の前に、拙者がなにか曲を奏でてしんぜよう」と言い出す。まるで、時代劇のような口調だと思ったが、また失言になるといけないので口をつぐんでいた。

ショパンは、きょろきょろと辺りを見回している。どうやら、ピアノを探しているようだった。あいにく、桑田の家にそんなしゃれたものなどない。

そういえば、昔買ったカシオ・トーンがあったじゃないか、と思い出し、それを持ってくる桑田。

ショパンはほっとした顔をして、「ノクターン」を弾き始める。

演奏をしながら、彼は言う。

「拙者のオリジナル曲なんだがね。自分の曲を自分で弾いて、それをよそ様に聴かせるなんざあ、照れる、照れる」

なんだか、ショパンという人がとても庶民的で、愛おしく思えてきた。

「ショパンさんの曲は前から好きでしたよ。ほら、今カシオ・トーンの『ピアノその1』の音色で弾いている、その曲だって」わたしは、彼をとことん、褒めちぎりたくてしかたがなくなっていた。

その言葉を聞き、ショパンはまんざらでもない表情を浮かべるのだった。

「ノクターン」を弾き終わると、ショパンは一息つき、

「次の曲は、拙者がまだ誰にも聴かせたことのない、とっときだぞ。さあ、ご静聴、ご静聴！」

確かに知らない曲だったが、どの断片を切り取っても、やはりショパンらしい名曲だった。

心地よく耳で味わいながら、そういえば、ショパンはピアノが弾けるんだったなあ、としみじみ思うのだった。

逃走する自転車

繁華街で突然、大声が響いた。

「誰かつ、あの自転車を捕まえてくれっ！」

振り返ると、この人混みの中を、自転車が猛スピードで逃げていく。後ろ姿なのではっきりしないが、男であることは間違いない。

周辺はたちまち物々しい雰囲気となり、買い物客も通行人も、一斉に足を止めて様子をうかがっていた。

どうやら、重大な犯罪をやらかしたらしい。

その場にいた青年が携帯を耳に当て、緊張した面持ちで何か話している。警察に通報しているようだ。しかし、焦っているせいか、要領を得ない。相手から何度となく、状況の確認を求められているのが見てとれた。

「ですから、逃げていったんです。はい？ いえ、そうじゃなく、自転車がです。えっ？ 違う違う、自転車の盗難じゃなくてですね……ええ、はい。そうです、犯人です。犯人が、自転車に乗ってですよっ！」

そこへ30代半ばの男がやって来て、集まっている人に向かって言った。

「あのう、ぼく、非番の郵便配達員なんですけど、その逃げていった犯人を捕まえてきますよ。これも郵便局員の仕事だと思いますので」

たまたま居あわせたバイク屋の店主が、

「なら、うちのバイクを使ってくれ。なあに、ぶっ壊したってかまわねえ。あんたの心意気に惚れちまったのさ」と申し出る。

郵便配達員は礼を言うと、ショー・ウィンドウに飾られていた、スズキ・ハヤブサにさっそうとまたがった。彼の目つきがキリッと引き締まる。

リア・タイヤに白煙を絡ませながら、ハヤブサが店から飛び出してきた。わたしの目の前で止めると、

「乗らないか」と、手を差し伸べる。

「えっ、わたし？」わたしは戸惑いつつも、思わずその手を取って、あっという間にタンDEM・シートに乗せられていた。

「つかまってっ！」郵便配達員が言う。

「あ、はいっ」

ものすごい加速で、ハヤブサは商店街を走り始めた。

ものの数秒で、逃走する自転車に追いついてしまう。

「おらおらおらっ、待てや、この犯罪者めっ！」郵便配達員の怒号が飛ぶ。反射的に振り返った自転車の男は、真後ろを最速のバイクがぴったりとつけているのに気づき、よほどたまげたと見える。ハンドル操作を誤り、そのまま練り物屋に突っ込んでしまった。

呆然と座りこんだ男の頭には、はんぺんとかんにゃくがきれいに積み重なっていて、片方の鼻の穴にはごぼう巻きが詰まっている。

観念したらしく、正座をし、黙ってがんもどきを嚙り始めた。

わたし達はバイクを降り、その場で警察に連絡をした。

「で、あんた、何をやらかしたんだ？」郵便配達員が問いたです。

「手を洗わなかった……」ぼそっと答える。

「は？ なんだって？」

「トイレから出た後、手を洗わなかったんだよ」

「それだけか？ 他にも隠してるだろう？」と郵便配達員。

「……おれ、寿司屋やってんだけど、トイレ行って、手を洗わなかったんだ。そしたら、客にばれちまってよ。で、逃げたってわけよ」

郵便配達員は、彼の頭を平手でパンツとはたいた。

「公衆衛生隠匿罪は大罪だぞ、おいっ！」

わたしも同意し、何度もうんうん、とうなずくのだった。

3Dグラフィックスで遊ぶ

パソコンで3Dグラフィックスを始めた。思っていたよりも、ずっと簡単だ。わたしは夢中になって、「航空機」の制作を始める。

ところが、ちょっと困ったことになった。

出来上がった航空機は大きすぎて、画面の中でパンパンなのだ。

どうしたものかと考えているうち、モニターからぐいぐいとはみ出してくる。

これはまずい、と慌てて手で押し込もうとするが、何しろ相手は航空機だ。人間の力ではどうにもならない。とうとう、すっかりこちら側に出てしまった。

仕方がないので、窓を全開にし、航空機を外へと追い出した。航空機は、まるで風船のようにふわりと宙を漂いはじめる。

街じゅう大騒ぎになるだろうな。わたしは心配になった。全長が数十メートルもある巨大な航空機が、いきなり上空に現れたのだから。

けれど、道ゆく誰1人として気にする者がいない。

「ははあ、あれが3Dグラフィックスだとわかってるんだな」わたしはそう合点する。

とはいえ、このままでは邪魔になる。そのうち、苦情の電話も来るかもしれない。十分に楽しんだのだから、そろそろ消去しておくか。

わたしは、3Dグラフィックス専用の消しゴムを手に、ベランダに出た。手すりに足を掛け、えいっ！ と航空機に飛び乗ると、手の届く所からゴシゴシと消し始める。

この作業はたやすいことではなかった。

まず、航空機は大き過ぎた。せめて戦闘機にしておけばよかった、と今さらながらに後悔する。

さらに、これは3Dグラフィックスなので、「面」を消した後、ワイヤー・フレームを形作っている「線」も消す必要があった。それをしないと、すっかり消したことにはならないのだ。

汗をかきかき、大部分を消し終える。残念ながら、完全にというわけにはいかなかった。3Dグラフィックス・ソフトのバグかもしれないが、部分的に残ってしまっていた。

残った部分は洗濯機にそっくりだ。脱水槽にはそうめんが水切りされて置かれていた。

動いて空腹だったので、そうめんをザルに取って、昼食代わりにする。

脱水しただけのことはあって、きれいに水分が飛んでいた。味も悪くはない。

ほのかに洗剤の香りがしたが、それくらいは我慢しよう。

風呂を増設する

居間に風呂を増設しようと思いつく。

座椅子ごと湯につかれるとあって、たちまち評判になり、隣近所からひっきりなしに人が訪れるようになった。

「なんやねん、なんやねん」と奇声がするので振り返ると、明石家さんまが、窓枠に前歯を引っ掛けてのぞいている。たまたま、近くを通りかかったらしい。

「あの、よかったらうちの風呂に入っていきますか？」と勧めるが、

「あ、ええねん、ええねん。ほいなら、わし急ぐからっ」と足早に去っていった。

30分も経たないうちに、テレビで明石家さんまを見る。

「……でな、わし、銭湯を経営することにしたんや。儲かるで、ありゃ。ほんまやっ」

どこに銭湯を建てるつもりだろう。完成したら行ってみようかな。

明石家さんまの銭湯は、渋谷の道玄坂辺りに作られたという。連日、行列ができるほどの大盛況らしい。

友人の桑田が湯上がりのさっぱりした姿でやって来て、わたしにこう言った。

「なんだ、むうにい。おまえ、まだ『さんまの湯』に行ったことがないのか。いいぞ、すごいぞ。湯船が100もあって、人が10万人入っても、ぜんっぜん余裕なんだな、これが。おっくれてるう〜っ。まーだ、入ったことないなんて〜、ふんふ〜ん」

悔しいので、わたしも行ってみることにした。

うっかり新宿駅で降りてしまい、しかたなく渋谷まで歩く。

明治神宮辺りまで来たとき、先の見えないほどの列に出くわした。

「あの、これってなんの列ですか？」わたしは、並んでいるおばさんに聞いてみた。

「何って、あんた。さんまちゃんの銭湯に決まってるじゃないの。『さんまの湯』よ。あ、あんた、洗面道具持ってきてる？ あそこケチだから、貸し出ししてないわよ」

それにしても、すごい人だ。1キロは続いているのではないだろうか。

わたしはなんだか面倒になり、今日は引き返すことにした。

(次に来るときは、ちゃんと洗面道具を持ってこよう)

明石家さんまは、テレビに出演するたびに、「さんまの湯」を自慢していた。確かにそれだけのことはある。増築に次ぐ増築で、今や都庁のツイン・タワー並に巨大なものになっていたのだから。

後日、ウィキペディアで調べてみたところ、「さんまの銭湯御殿」と呼ばれるようになった、と記されていた。

隅田川にカブトエビが現れる

隅田川に、途方もなく大きなカブトエビが住みついた。非常に凶暴で、ここ数日の間に何十人もの犠牲者が出たのだ。

わたしは「カブトエビ学会」というものに出席していて、たまたまそこで「巨大水生生物研究所」の所長をしているという、女性に出会った。

「隅田川にたまたま流れ込んだ『E-156』という甘味料の1種が原因だ、とわたしは見ているわ。あれは、生物の細胞の中の抑止遺伝子を取り除いて、急速成長させてしまうことがあるの」

「では、どうしたらいいんですか？」わたしは尋ねた。

「そうね。他に巨大化した生き物がないところを見ると、『E-156』は相当に希釈され、すでに促進作用は失われたと見るべきだわ。つまり、あのカブトエビ1匹だけ相手にすればいいのよ」

しかし、このカブトエビ、並の強さではない。警官が拳銃を発砲したが、固い甲羅にあっけなく撥ね返されてしまった。

ついに自衛隊が出動する事態となったが、RPGすら貫通しない。わずかについた傷さえ、彼らの持つキチンキトサンによって、たちまち再生されてしまうのだった。

隊員たちは口々に、「お手上げだ」「どうにもならん」などと絶望の色を隠せずにいる。

女性生物学者は、

「どうやら、わたし達の研究成果を見せる 때가来たようね」と静かに言った。

わたしは彼女といっしょに研究所に行く。

プロジェクトに関わる者が数百人はいた。彼らは一様に、ああ、ついにこの日が来たのか、という表情を浮かべていた。

「例の物を」彼女が声をかけると、研究員の1人が足早に別室へと向かう。

ほどなく戻ってきて、小さなカプセルを手渡すのだった。

「これは最後の手段よ。さあ、これを持って、隅田川へ行きなさい。カブトエビは、間違いなく死滅することでしょう」

わたしは重大な任務と心得、大急ぎで隅田川へ取って返した。

カブトエビはますます凶暴になって、堤防のあちこちを破壊し、手の付けようがなかった。

手の中のカプセルを、えいっ！ と川へ放り投げた。

ゴボゴボと泡が湧き、カブトエビよりも、ずっと大きなカブトガニが出現した。

女史の言葉が蘇る。

「カブトエビのライバルはカブトガニよ。しかも彼らは天然記念物だから、誰にも決して倒せないの」

カブトガニはカブトエビを無数の脚で包み込むように組み伏せ、あっという間に食い尽くしてしまった。

「やった……」わたしたちは勝利の杯を味わうことすら忘れ、ただ、呆然と立ち尽くすのだった。これで、隅田川周辺に、再び平和が訪れる。

次の瞬間、カブトガニはぐわっとこちらを振り返った。

カブトガニは天然記念物……その言葉が頭の中でわんわんと響くのだった。

週刊 夢の窓 No.1

<http://p.booklog.jp/book/84970>

著者：むうにい

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84970>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84970>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ